

メッセージアウトライン ヨハネ18：1~11「父が下さった杯」

イエスは17章の長い祈りの後、弟子たちとともにエルサレムの二階座敷を出て、町の東側にあったケデロン谷を渡り、その向こう側へ行かれた。(1)そこはオリーブ山であり、園とはゲツセマネの園のことである。→ルカ22:39,マタイ26:36
イカリヤのユダもこの場所をよく知っていた。(2)ユダに率いられて一隊(600人)の兵士たちと役人たちが、ともしびとたいまつと武器を持ってやって来た。(3)

イエスは逃げ出すようなことはせず、自ら出て来て、「だれを捜すのか」と言われた。(4)「ナザレ人イエスを」との答えに、イエスは堂々と彼らの前に立って、「それはわたしです」と言われた。(5)その時彼らは後ずさりして、地に倒れた。(6)イエスはそのひとことで敵を圧倒するほどの力と権威あるお方なのである。そしてヨハネ17:12のみことばの実現のため「もしわたしを捜しているのなら、この人たちはこのままで去らせなさい」と言われ、弟子たちを守られた。(8,9)これは弟子たちが信仰をなくさず、危機を乗り切って最後まで信仰を全うできるようにとの配慮であった。

そんなイエスの思いを少しも知らずに、弟子のシモン・ペテロは剣を抜いて大祭司のしもべを撃ち、右の耳を切り落とした。(10)しかしそれはイエスの望まれる方法ではなかった。「剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう」(11)→並行箇所マタイ26:52~54,ルカ22:51参照

イエスが捕らえられるのは神の救いの計画の実現、預言の成就であり、「父がわたしに下さった杯」なのであるとイエスは言われる。そしてそれをイエスは今飲み干そうとしておられる。まさに権威ある者、回りの敵に少しも動じることのない王としての姿がここにある。今、イエスは雄々しく十字架への道を進まれるのである。

イエスは力のないお方ではない。志なかばで失敗し、殺されてしまった哀れな宗教の教祖でもない。人間に対する神の愛とその救いの計画を実現しようとしてまっすぐに父なる神のみこころに従われる力ある、勇気ある、雄々しいお方、神の御子であり、すべてのものの王であるお方なのである。

イエスは私たちの自己中心で、決して神に従おうとしない、自分が王様で世界の中心となっている、そのような外的な生き方、罪の暗闇の中にいる、そのような私たちを愛して身代わりとなって十字架にかかってくださるすばらしい救い主なのである。

イエスは父からの杯をこのように飲まれた。今、このイエス・キリストを信じる私たちも信仰者として神が下さる飲むべき杯があるのではないだろうか。従うべきみことば、負うべき重荷、歩むべき道、……目指すべき目標があるはずである。私たちも父なる神が与えてくださる杯を受ける者となり、そのことによって神の栄光を現す者となろう。 →ヘブル12:1~3